早稲田大学大学院教育学研究科紀要　別冊　25号―２　2018年３月

留学価値が留学生活適応感・充実感に及ぼす影響

―在日中国人私費留学生を対象に―

肖　　雨　知

問題と目的

青年期の留学生たちはなぜ今まで慣れてきた生活環境から離れ，一人で海外に行って生活するのであろうか。この留学行為の背後には何らかの動機的要因が存在し，そして，異なる動機的要因がどのように彼らの留学生活の適応感と充実感に影響を及ぼすのであろうか。

近年，日本政府は国際支援を目的としてきた留学生受け入れ政策を改革し，2008年に「留学生30万人」計画という大幅な受け入れ方針を表明した。2016年までに在日外国人留学生数は23万人を超えた（JASSO，2016）。留学生が日本の文化・教育・研究・経済領域に貢献している一方，彼らの適応問題も注目されるようになってきている（香川，2014）。このようなグローバル化が進んでいる情勢下で，異文化適応の予測要因を探索すること，留学生へのサポートについて提言をするために有意義であると考えられる。

異文化適応に関する研究

留学とは，これまで生活してきた社会環境から離れ，異なった新たな環境で勉強，生活していく行為として捉えられる。そして，留学生活における適応感を扱った研究の中では異文化適応研究が代表的である。これまでの異文化適応の要因研究では，環境面について，ソーシャル・サポートと異文化適応感との関連が明らかになっている（Ward & Kennedy, 1993；周・深田，2002）。個人面に関しては，性別，滞在年数，海外滞在経験，経済能力，言語能力などの個人背景的属性について検討された研究が多い（レビューとして，Zhang & Goodson, 2011）。一方，高井（1989）とChirkov（2009）は心理面の要因に関する研究はまだ不十分であると指摘している。心理面の要因の中で，特に動機的要因が重要とされているが（譚・渡辺・今野，2011），心理学領域では留学動機を理論に基づいた上で行った研究は少ない（Chirkov, Vansteenkiste, Tao, Lynch, 2007）。

異文化間移動の動機に関する研究

留学目標に関する研究　異文化間移行の理由は移行者の移行形態によって異なる。そして，留学生は他の形態（例えば，難民，国際結婚，軍隊駐留など）より移行行動における自主性が高いとされている（田中，1998）。つまり，彼らは他の自主性の低い移動形態に比べ，常に何らかの目標をもって移動する傾向があるのである。よって，彼らの留学動機を考察する時に，留学目標というアプローチが重要であると考えられる。

岡・深田・周（1996）は中国人留学生の留

学目的を「勉学」,「交流」,「文化体験」,「言語」という4領域があるとしている。また，葛（1999）は13名中国人留学生にインタビューを行った結果,「学位」,「日本語の勉強」,「先進国をみてみたかった」,「経済的な目的」,「自分の将来を変えるため」と「ただ漠然に中国から離れたかった」という6つのカテゴリーが析出された。さらに，小柳（2006）は留学動機を「留学という行動をとらせた要因」と定義し，在日アジア系留学生に面接を行った結果，9つのカテゴリーが抽出された。それぞれは「学問志向」,「キャリア志向」,「海外体験志向」,「親の影響」,「脱母国教育志向」,「脱母国社会志向」,「母国の高等教育不備」,「人生勝者志向」と「奨学金の影響」であった。これらの研究から，ほとんどの留学生は何かしらの目標を持って来日したということはいえるのであろう。しかし，彼らの留学目標と留学生活の適応感との間にどのような関連を持つかは十分に検討されていない。

目標内容理論からの示唆　目標がいかに人の行動そして適応感に影響を及ぼすかという問題を扱った理論の中で，自己決定理論の下位理論である「目標内容理論」(goal contents theory）が代表的である。Deci と Ryan（2000）は，適応的行動を起こすことには追求する目標の理由及び追求する目標の内容の両方ともに重要であると述べている。Kasser と Ryan（1993, 1996）は基本的心理欲求を直接的に満たすかどうかを基準として，目標の内容を外発的なものと内発的なものに分けることができると唱えた。内発的目標内容（intrinsic aspiration）は自己受容，親和，社会貢献，身体的健康に関する内容が含まれており，ウェルビイン一グに寄与する一方，外発的目標内容（extrinsic aspiration）は経済的成功，社会的名声，魅力的外見に関する内容が含まれており，ウェルビインーグと負の関連があると予測した（Kasser & Ryan, 1996)。

目標内容理論の立場から目標内容と精神的健康及び適応との関連を検討したこれまでの研究（レビューとして，Kasser, 2003）によると，内発的目標内容の追求はウェルビーイングに正の影響を及ぼす一方，外発的目標内容の過度追求はウェルビーイングに負の影響を及ぼすことが明らかにされている。また，近年，内発的目標内容が学習動機づけにも適応的な影響を及ぼすことが海外では Vansteenkist et al.（2004）Vansteenkiste, Lens, & Deci（2006）の一連の研究，日本では鈴木・櫻井（2011）の研究によって明らかにされている。さらに，目標内容が進路選択に及ぼす影響を検討した研究も近年現れてきた（Kerlow-Myers, 2012；鈴木・村上・桜井，2013)。

目標内容理論に基づき，留学動機と留学目標内容を同時に扱った研究として Chirkov et al.（2007), Chirkov, Safdar, De Guzman, & Playford（2008）があげられる。そして，Chirkov et al.（2007）は，自律性の高い留学目標の理由（留学動機）は異文化適応に正の影響を与えることを示した。同様な結果は，日本においても示されている（譚他，2009，2010，2012)。一方，目標の内容面に関して，Chirkov et al.（2007）は，中国人留学生の留学目標内容について母国で起こりうる不利な状況を回避する為の留学という「安全保障（preservation)」と自己の成長につながる為の留学という「自己成長（self-development)」という2因子を抽出した。「安全保障」因子は適応指標との間に負

の相関が示されたが，「自己成長」因子と適応指標との間に関連は見られなかった。Chirkov et al.（2008）の縦断研究も似たような結果であった。これらの結果は，Tartakovsky と Schwartz（2001）で得られた「自己成長」は適応指標に正の影響を及ぼし，「安全保障」と「物質主義」は適応指標に影響を及ぼさないという結果に一致していなかった。Chirkov et al.（2007）は留学目標に関して更なる検討が必要と述べているが，それ以来自己決定理論の枠組を用いて留学目標と適応との関連を検討した研究は，筆者が知る限りなかった。

本研究が使用する定義，指標及び研究目的

異文化適応の定義と指標　異文化適応の定義に関して，本研究では適応感の内部構造に目を向けた田中（1998）の「心身が健康で，社会的にも良好な状態で課題達成を遂げており，異文化性に基づく困難を乗り越えて異文化理解を果たしている」という定義を使用する。

異文化適応の領域に関して，先行研究（例えば，Simic-Yamashita & Tanaka, 2010）で扱われた複数の領域の中に共通して挙げられている「学業・研究領域」，「対人関係領域」及び「心身健康領域」を本研究の適応領域として用いることにする。「対人関係領域」は，在日中国人留学生が特にストレスを感じやすく，適応感において影響が大きいとされる日本人との対人関係に着目した（レビューとして，譚他，2011）。また，田中（1998）の定義によると，異文化適応における課題の達成は充実感をもたらすため，今回は充実感気分も加えて測定することにする。なお，本研究は，留学生と他の移行対形態の異文化適応感と区別するために，「留学生活適応感」という言葉を使用する。

留学目標に関する指標　Chirkov et al.（2007, 2008）で使用した尺度の α 係数が低く，留学目標が留学先の国によって規定される部分が大きいため，ここで使用しないことにする。本研究は，留学目標を達成することによってもたらす留学価値に着目し，新たに尺度を作成する。

本研究の目的　本研究は，上述した「留学価値」が「留学生活適応感」，「充実感」に及ぼす影響を調べることを本研究の目的とする。

仮説と分析モデル　先行研究の結果を踏まえ，留学価値と留学生活適応感・充実感との関連ついて仮説 1～3 を立てた。

仮説 1.「内発的留学価値」は「留学生活適応感」に正の影響を与えるであろう。

仮説 2.「外発的留学価値」は「留学生活適応感」に負の影響を与えるであろう。

仮説 3.「内発的留学価値」は「充実感気分」に正の影響を与えるであろう。

分析モデルは田中・松尾（1994）の異文化適応感階層モデルに基づいて考案した。異文化環境での生存を保証されるレベルを適応の最低条件とし，その上層に愛と承認の欲求に対応する「対人領域」の適応，更にその上に自己実現に対応する「学習領域」における成功という異文化課題の達成（「充実感気分」につながる）というようなモデルを想定した。

なお，本研究は「心身的健康」を対人・学習領域における適応感の従属変数として位置づける。その理由は班（2004）が述べたように，不適応は異文化環境との相互作用によって生じ，そして不適応は様々な心身症状を引き起こすからである。

「外発的留学価値」は 3 つの適応領域に直接

に負の影響を及ぼし，「内発的留学価値」はすべての適応領域及び充実感の正の影響を及ぼし，なお，従来の研究結果が示されたように，2つの留学価値の間に共分散を仮定した。また，「心身的健康」と「充実感気分」に影響を及ぼす他の共通要因が考えられるため，この2変数の誤差間共分散を仮定した。

男女が異なる社会的役割に要求されているため，留学生活において男子は卒業後の進路に不安を感じることに対し，女子は対人関係と経済状況に不安を感じることは近年 Yan と Berliner（2011）の質的研究によって明らかされた。したがって，本研究はまたこの分析モデルにおいて男女間の差を検討する。

方　法

調査時期・対象者と手続き

日本の大学，短大，専門学校に正式に在籍している中国人私費留学生を調査対象とした。通常の質問紙を用意したことに加え，専門ソフトウェアで作成した同じ内容のデジタル版の質問紙も用意した。本調査を行う前に，8月下旬に在日中国人留学生25名を対象に予備調査を実施し，中国語に翻訳した質問項目のニュアンスを心理学専攻の大学院中国人留学生と確認し，内容を全体的に整えた。

本調査は2015年9月上旬から10月下旬まで約2ヶ月間にかけて実施した。日本各地の大学の中国人留学生会で質問紙またはデジタル版質問紙にアクセスできるQRコードを配り，回収した。有効回答者合計118名（内訳：男子53名，女子65名，大学学部・短大・専門学校の学生60名，大学院生58名，平均年齢23.91歳）であり，回収率は12%であった。謝礼として，アンケートを回収した日から一ヶ月間以内に記入してもらったメールアドレスに一人につき300円のギフト券を送った。

倫理的配慮

調査への参加は自由意思によること，無記名回答することにより個人の匿名性は守られること，回答を拒否したり中断したりすることができること，回答を拒否したり中断したりしても不利益は生じないことなどを紙面に明記した。

質問紙内容

留学価値尺度　Kasser と Ryan（1993, 1996）が作成した Aspiration Index のうち留学と関連している4つの下位尺度（「自己成長」，「社会的貢献」，「金銭的成功」，「社会的名声」）から在日中国人留学生に相応しいと考えられる12項目を選び，1人の心理学専攻の大学院留学生と項目の内容を検討した後，「留学価値尺度」の原案を作成した。調査対象者に「留学目標を達成することはあなたにとってどのような価値をもつとあの時のあなたは思っていましたか」と教示し，7件法（1：当てはまらない～7：非常に当てはまる）で評定してもらった。

留学生活適応感尺度　植村（2004）の異文化適応尺度の「言語領域」に関する項目を除き，「対人領域」，「学習領域」と「心理的適応」の内，中国人正規留学生の適応感を測定することに相応しい項目を20個選び，4件法（1：当てはまらない～4：とても当てはまる）で回答を求めた。

充実感気分尺度　最近1ヶ月間の生活を振り返ってもらい，大野（1984）が作成した充実感尺度の内の一般充実感気分に関連する5項目を

5件法（1：当てはまらない〜5：非常に当てはまる）で評定してもらった。

個人属性に関する項目　留学価値と適応感・充実感との関連から個人属性の要因による影響を統制するため，性別，年齢，現在の所属大学は志望校であるかどうか，専攻，学年，滞日年数，来日当初の日本語レベル，留学生活全体における経済状況及び社会人経験について尋ねた。

結　　果

因子分析及び尺度の信頼性

留学価値尺度の因子分析と信頼性　留学価値を測定する12項目に対して項目分析を行ったところ，肯定的傾向（得点が4から7までを合わせた割合）の回答が80％に超えた項目2項目（項目4「自分自身の人生に責任を持てること」，項目5「さらに多くのことを学び，成長すること」）と否定的傾向（得点が1から4までの割合）の回答を80％に超えた項2目（項目11「注目を集めるようなことをすること」，項目12「有名になること」）を以降の分析から除外した。残りの8項目について最尤法による探索的因子分析を行った。固有値の変化（5.57，1.81，1.44，0.79，0.50，0.43，…）及び因子の解釈可能性を考慮すると，2因子構造が妥当であると考えられた。そこで2因子を仮定し，最尤法，Promax回転による因子分析を行った。項目8「自由になるお金たくさんあること」はどの因子にも負荷量が.40以下となったため，以降の分析から除外した。残りの7項目を再度に因子分析を行い，最終的な因子パターンと因子間相関をTable 1に示す。

因子Iは4項目で構成されており，自己成長及び社会貢献の項目が含まれているため，「内発的留学価値」と命名した。因子IIは3項目から構成されており，社会的名声及び金銭的成功に関する項目が含まれているため，「外発的留学価値」因子と命名した。尺度の内的整合性を検討するためにCronbachのα係数を算出したところ，「内発的留学価値」は.86，「外発的留学価値」は.87であり，十分な値が得られた。また，2因子の間に中程度の相関が見られた

Table 1　留学価値尺度の因子分析の結果（最尤法Promax回転後の因子パターン）

	M	*SD*	因子 I	II	h^2
Ⅰ　内発的留学価値（α＝.86）					
1　困っている人を助けること	3.95	2.04	$\boxed{.94}$	−.05	.85
2　他の人の生活をよくする手助けをすること	3.96	1.97	$\boxed{.84}$	.01	.71
3　世の中をよくすること	3.81	2.07	$\boxed{.82}$	−.01	.67
6　自分自身のことを知り、受け入れること	5.57	1.63	$\boxed{.51}$	.11	.32
Ⅱ　外発的留学価値（α＝.87）					
9　高収入の職に就くこと	4.45	1.88	−.09	$\boxed{1.00}$	.66
7　自分で起業すること	4.43	1.90	−.01	$\boxed{.82}$	.94
10　社会的地位の高い職に就くこと	4.12	1.97	.22	$\boxed{.65}$	.58
			因子間相関	.40	

（r＝.40, p＜.001）。各因子項目の平均得点を下位得点とした。

留学生活適応感尺度の因子分析と信頼性　留学生活適応感を測定する20項目に対して，度数分布を確認した後，最尤法による探索的因子分析を行った。固有値の変化（7.96，2.22，1.63，1.11，1.07，0.76，…）と因子の解釈可能性を考慮すると，3因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度3因子を仮定して最尤法，Promax回転による因子分析を行った。2回目以降の因子分析に際しては，因子負荷量.40を基準とし，その基準に満たさない項目「日本人ともっと知り合いたい」，「日本人の前では自分らしく振る舞えない」を分析から除外した。残りの18項目について再度同様な因子分析を行った。Promax回転後の最終的な因子パターンと因子間相関をTable 2に示す。

その結果，因子Iは7項目で，不安や抑う

Table 2　留学生活適応感尺度因子分析の結果（Promax回転後の因子パターン）

			因子			
	M	SD	I	II	III	h^2
Ⅰ．心身的健康（α＝.85）						
*3　イライラして落ち着かない	2.93	1.04	.81	−.28	.16	.58
*5　最近すぐ落ち込む	2.86	1.10	.78	.06	.03	.55
*9　最近体調が優れない	2.97	1.07	.73	−.03	−.16	.65
*4　最近ホームシックである	2.86	1.02	.65	.11	−.15	.40
*1　留学生活では不安になることが多い	2.73	0.97	.64	.03	.16	.69
*8　滞在国の生活習慣に不満がある	3.16	0.84	.57	.18	−.02	.49
7　心身共に良好である	2.74	0.96	.46	.31	.06	.43
Ⅱ．対人適応（α＝.89）						
18　日本人で信頼できる人がいる	2.55	1.13	.00	.88	−.03	.41
17　何かあった時相談できる日本人がいる	2.82	1.00	−.26	.85	.13	.57
20　日本出身の友人がいる	2.76	1.03	.08	.76	−.01	.54
10　日本人との人間関係に満足している	2.73	0.93	.12	.76	−.11	.43
*2　日本の人たちに接する時はどこか無理をしている	2.59	1.01	.18	.57	.10	.52
Ⅲ．学習適応（α＝.85）						
14　学生生活は充実している	2.70	0.96	−.08	.07	.75	.57
13　学習・研究が順調である	2.47	0.80	−.09	.03	.75	.53
15　思うように勉強できている	2.45	0.87	−.18	.12	.75	.49
*11　自分の思う様に学習・研究できていない	2.75	1.00	.20	−.17	.69	.70
*12　十分に、勉強・研究に打ち込めていない	2.70	0.97	.14	−.07	.61	.74
16　学生生活に満足している	2.73	0.93	.10	.29	.42	.63
		因子間相関		.45	.56	
					.58	

注）（＊）は逆転項目を示す。

つなど心理的状態を示す項目や身体的症状を示す項目が高い負荷量を示したため，「心身的健康」因子と命名した。因子IIは5項目で，対人領域に関する適応項目が高い負荷量を示したため，「対人適応」因子と命名した。因子IIIは6項目で，学習，研究等の学業に関する項目が高い負荷量を示したため，「学習適応」因子と命名した。内的整合性を検討するためにCronbachのα係数を算出したところ，順に.85，.89，.85となり，十分な値が得られた。各因子項目の平均得点を各下位尺度得点とした。

充実感気分項目　充実感気分項目の内的整合性を検討するためにCronbachのα係数を算出した結果，全体で$\alpha=.94$という十分な値が得られた。5つの項目の平均得点を下位得点とした。

相関分析

この分析から全ては性別，所属，滞在年数，来日前の日本語レベル，留学生活全体における平均経済状況を統制した上で行った。留学価値と適応感・充実感との関係を明らかにするために，偏相関係数を算出した。その結果，内発的留学価値は対人適応と充実感気分との間に有意な正の相関がみられた（順に$r=.21$, $p<.05$, $r=.44$, $p<.001$）。一方，外発的留学価値は心身的健康との間に負の相関がみられた（$r=-.19$, $p<.05$）。

さらに，2つの留学価値の間に中程度の相関が見られたため，それぞれを統制した上で偏相関係数を算出した（Table 3）。

共構造分散分析

全体モデル　留学価値が留学生活適応感及び充実感に及ぼす影響のモデルを検証するため，Amos19を使用し，共構造分散分析を実施した。モデル全体の適合度は$\chi^2=11.22$，GFI＝.97，AGFI＝.90，CFI＝.97，RMSEA＝.09，AIC＝41.22であり，概ね良好な値が示された。分析結果をFigure 1に示す。

男女別モデル　男女間の差を見るために2群において同じパスを想定するがパス係数を制約しないこととし，同時多母集団分析を実施した。適合度は$\chi^2=14.53$，GFI＝.96，AGFI＝.87，

Table 3　各尺度または項目間の偏相関係数及び基礎統計量

		1	2	3	4	5	6	M	SD	α係数	得点範囲
1	内発的留学価値[a]	—	$.41^{***}$	$-.08$	$.21^{*}$	.10	$.44^{***}$	4.32	1.63	.86	1～7
	内発的留学価値[b]	—	—	*.00*	$.25^{**}$	*.15*	$.42^{***}$	—	—	—	
2	外発的留学価値[a]		—	$-.19^{*}$	$-.05$	$-.09$	.15	4.33	1.71	.87	1～7
	外発的留学価値[b]		—	$-.17^{\dagger}$	*−.15*	*−.14*	*−.04*	—	—	—	
3	心身的健康			—	$.51^{***}$	$.58^{***}$	$.37^{***}$	2.89	.75	.85	1～4
4	対人適応				—	$.56^{***}$	$.37^{***}$	2.68	.85	.89	1～4
5	学習適応					—	$.46^{***}$	2.64	.70	.85	1～4
6	充実感気分						—	3.39	.96	.94	1～5

$^{\dagger}p<.1$　$^{*}p<.05$　$^{**}p<.01$　$^{***}p<.001$

a. 性別，所属，滞在年数，来日前の日本語レベル，留学全体の平均経済状況を統制した上での偏相関係数である。

b. aの上に更に2つの留学価値のうち，内発は外発を，外発は内発をそれぞれ統制した上での偏相関係数である。

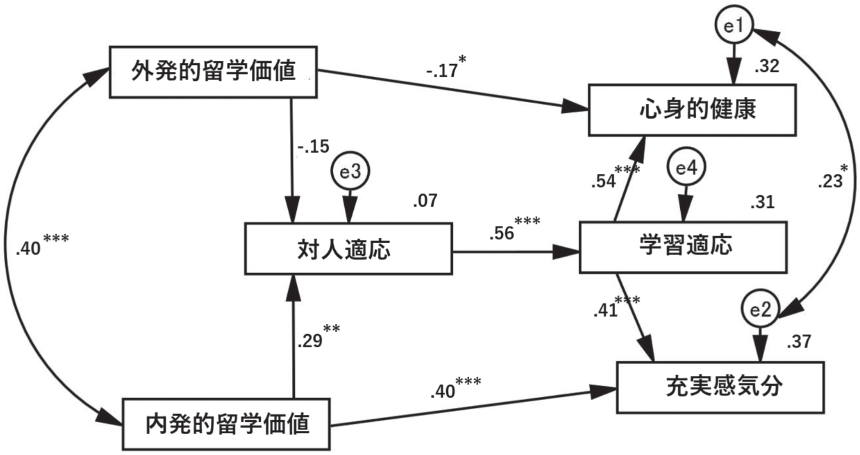

Figure 1　留学価値―留学生活適応感・充実感のモデル（全体 $N=118$）

$^{*}p<.05$, $^{**}p<.01$, $^{***}p<.001$

注）パス上の数値は標準化係数，従属変数右肩の数値は標準決定係数を示す。

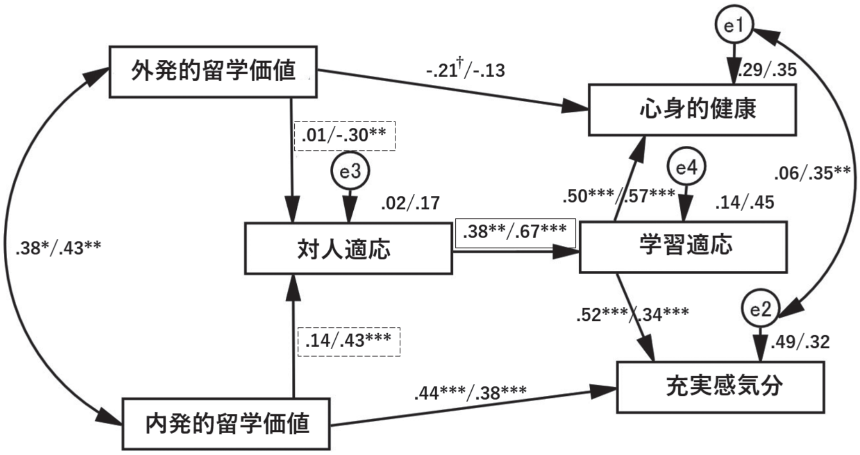

Figure 2　男女別による留学価値―留学生活適応感・充実感のモデル

$^{\dagger}p<.10$, $^{*}p<.05$, $^{**}p<.01$, $^{***}p<.001$

a）パス上の数値は標準化係数，従属変数右肩の数値は標準決定係数を示す。

b）男子 / 女子の数値を示す。

c）破線は男女間の有意傾向を示し p<.10, 実線の枠は男女間 p<.05 水準の有意差を示す。

CFI = .97, RMSEA = .04, AIC = 74.53 であり，概ね良好な値が示された（Figure 2）。

各パスにおいて差の検定を行ったところ，有意傾向または有意差が見られ，それぞれ，外発的留学価値から対人適応へのパス（$z = 1.91, p < .10$），内発的留学価値から対人適応へのパス（$z = 1.85, p < .10$），対人適応から学習適応へのパス（$z = 1.98, p < .05$）であった。

考　　察

留学価値の構造及び留学生活適応感・充実感との関連

留学価値尺度について因子分析を行った結果，「内発的留学価値」と「外発的留学価値」の2因子構造が確認された。留学価値に関する仮説を検証するため，2つの留学価値と留学生活適応感・充実感との相関を検討したところ，3つの仮説はほぼ支持された。これらの結果はすべて，目標内容理論に支持するものと言えよう。

留学価値―留学生活適応感・充実感のモデル

全体モデルを分析した結果，概ねに良好なモデル適合値が得られた。よって，このモデルはある程度に妥当性があると言えよう。また，予想した「対人適応」→「学習適応」→「充実感気分」という適応感の階層構造はこのモデルに適合していた。このモデルによると，対人領域の適応は学習面と心身面の適応の基盤となり，留学の課題を達成するための土台になると考えられる。

本研究ではまた，男女間に留学価値が留学生活適応感・充実感に影響を与えるプロセスにおいて違いが見られた。「外発的留学価値」が対人適応に与える負の影響は男子において見られなかった。また，「対人適応」から「学習適応」へのパス係数において，男子は女子より低かった。この男女差は，男女の社会的役割によって生じたものであると考えられ，質的研究 Yan と Berliner（2011）の裏付けともなる。

留学生支援への示唆

今回の研究では，留学生活適応感・充実感内部の階層関係はみられ，対人面の適応は学習面の適応の基盤になることが示唆された。この研究結果を考慮すると，留学生への支援の中で，特に女子の場合，対人面の支援は優先すべきと考えられる。

また，留学価値と留学生活適応感・充実感間の関連が認められた。結果からみると，外発的留学価値を持つ人は留学生活における適応感が低く，内発的留学価値を持つ人は留学生活における適応感が高いということであった。これは，介入方法の1つとして全体的に適応感を高めるために内発的留学価値を促すこと，外発的留学価値を低める働きかけをすることが有効と示唆される。しかし，今回の調査結果だけをもとに論じるのは時期尚早であり，同様の結果が再現されるかは今後検証を重ねていく必要があると考えられる。

本研究の限界と今後の課題

研究方法に関して，本研究は以下の2つの限界がある。第1に，今回は時間の制約があるため，回想法を使用し，留学前後の関係を解明しようとした。回想法によって当時の事を正確に回想できない可能性がある。第2に，適応感の低い人にアクセスし難いため，サンプルが偏

り，適応感の低くない人だけを反映した結果になる可能性がある。したがって，本研究の結果を一般化することは危険であり，今後更なる検証が必要となろう。

また，今後の課題について以下の２つを挙げたい。第１に，今回は「心身的健康」を適応の結果として扱った。しかし,「心身的健康」は原因となる可能性もあることを注意しなければならない。この点は，縦断的な研究デザインによって解決される。第２に，今回取り上げた３つの領域は従来の研究で重要であると示された領域であったが，対人領域（日本人との対人関係）に関して，場面を特定していなかったため，どのような場面で誰との対人関係がどれぐらい適応指標に影響を及ぼしたかが考察できなかった。今後は，この点についてさらに詳しい研究が求められる。

引用文献

班　偉（2004）．中国人留学生の異文化不適応と日本コンプレックス．山陽論叢，11，105‒125.

Chirkov, V., Vansteenkiste, M., Tao, R., & Lynch, M. (2007). The role of self-determined motivation and goals for study abroad in the adaptation of international students. *International Journal of Intercultural Relations*, ***31***, 199‒222.

Chirkov, V. I., Safdar, S., De Guzman, J., & Playford, K. (2008). Further examining the role motivation to study abroad plays in the adaptation of international students in Canada. *International Journal of Intercultural Relations*, ***32***, 427‒440.

Chirkov, V. I. (2009). A cross-cultural analysis of autonomy in education A self-determination theory perspective. *Theory and Research in Education*, ***7***, 253‒262.

Deci, E. L., & Ryan, R. M. (2000). The” what” and” why” of goal pursuits: Human needs and the self-determination of behavior. *Psychological inquiry*, ***11***, 227‒268.

葛　文綺（1999）．留学生の異文化適応に関する研究：来日目的，対日イメージと適応度との関連を中心に．名古屋大學教育學部紀要．心理学，***46***，287‒297.

Grouzet, F. M., Kasser, T., Ahuvia, A., Dols, J. M. F., Kim, Y., Lau, S., ... & Sheldon, K. M. (2005). The structure of goal contents across 15 cultures. *Journal of personality and social psychology*, ***89***, 800‒833.

香川　克（2014）．臨床心理学研究の動向と課題．教育心理学年報，53，83‒95.

Kasser, T. (2003). *The high price of materialism*. MIT press.

Kasser, T., & Ryan, R. M. (1993). A dark side of the American dream: correlates of financial success as a central life aspiration. *Journal of personality and social psychology*, ***65***, 410‒422.

Kasser, T., & Ryan, R. M. (1996). Further examining the American dream: Differential correlates of intrinsic and extrinsic goals. *Personality and Social Psychology Bulletin*, ***22***, 280‒287.

Kerlow-Myers, A. E. (2012). *Assessing the relationship of career goal autonomy and intrinsic content on vocational and general well-being*. STATE UNIVERSITY OF NEW YORK AT ALBANY.

文部科学省（2008）．「留学生 30 万人計画」骨子.

岡　益己・深田　博己・周　玉慧（1996）．中国人私費留学生の留学目的及び適応．岡山大学経済学会雑誌，***27***，25‒49.

大野　久（1984）. 現代青年の充実感に関する一研究 . *The Japanese Journal of Educational Psychology*, ***32***, 100‒109.

小柳　志津（2006）．感情心理学からの文化接触研究：在豪日本人留学生と在日アジア系留学生との面接から．風間書房.

Simic-Yamashita, M.・田中　共子（2010）．在日留学生の間での社会文化的適応のスケールの探索的因子分析．岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要，***29***，206‒195.

鈴木　高志・村上　達也・櫻井　茂男（2013）．将来目標と職業選択活動との関係：生徒・進路指導への示唆．筑波大学心理学研究，***45***，71‒82.

鈴木　高志・櫻井　茂男（2011）．内発的および外発

的な利用価値が学習動機づけに与える影響の検討．教育心理学研究，*59*，51–63.

高井　次郎（1989）．在日外国人留学生の適応研究の総括．名古屋大學教育學部紀要．教育心理学科，*36*，139–147.

譚　紅艶・今野　裕之（2012）．中国人留学生における日本人への信頼感と適応の関連．青年心理学研究，*24*，15–30.

譚　紅艶・今野　裕之・渡邉　勉（2009）．異文化の対人適応における動機づけの影響．対人社会心理学研究，*9*，101–108.

譚　紅艶・渡邊　勉・今野　裕之（2010）．動機づけの自己決定性が在日中国人留学生の主観的幸福感および学習・生活への適応に及ぼす影響．目白大学心理学研究，*6*，43–54.

譚　紅艶・渡邉　勉・今野　裕之（2011）．在日外国人留学生の異文化適応に関する心理学的研究の展望．目白大学心理学研究，*7*，95–114.

田中　共子（1998）．在日留学生の異文化適応．教育心理学年報，*37*，143–152.

田中　共子・松尾　馨（1994）．異文化欲求不満における反応類型と事例分析：異文化間インターメディエーターの役割への示唆．広島大学留学生センター紀要，*4*，81–100.

Tartakovsky, E., & Schwartz, S. H. (2001). Motivation for emigration, values, wellbeing, and identification among young Russian Jews. *International Journal of Psychology*, *36*, 88–99.

植松　晃子（2004）．日本人留学生の異文化適応の様相：滞在国の対人スキル，民族意識，セルフコントロールに着目して．発達心理学研究，*15*，313–323.

Vansteenkiste, M., Lens, W., & Deci, E. L. (2006). Intrinsic versus extrinsic goal contents in self-determination theory: Another look at the quality of academic motivation. *Educational psychologist*, *41*, 19–31.

Vansteenkiste, M., Simons, J., Lens, W., Soenens, B., Matos, L., & Lacante, M. (2004). Less is sometimes more: Goal content matters. *Journal of Educational Psychology*, *96*, 755.

Ward, C., & Kennedy, A. (1993). Where's the "culture" in cross-cultural transition Comparative studies of sojourner adjustment. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, *24*, 221–249.

Yan, K., & Berliner, D. C. (2011). Chinese international students in the United States: Demographic trends, motivations, acculturation features and adjustment challenges. *Asia Pacific Education Review*, *12*, 173–184.

Zhang, J., & Goodson, P. (2011). Predictors of international students' psychosocial adjustment to life in the United States: A systematic review. *International Journal of Intercultural Relations*, *35*, 139–162.

ABSTRACT

The Effects on Cross-cultural Adaptation
— The Roles of Utility Value for Chinese Students Studying within Japan —

Yuzhi XIAO

Purpose of the present study is to examine whether utility value for studying abroad influences cross-cultural adaptation. In order to answer this question, 118 students from mainland China who are currently studying in Japan were asked to complete a questionnaire. Using a newly developed Utility Value for Study Abroad Scale, a two-factor structure was revealed that consists of an 'Intrinsic value factor', reflecting the value of pursuing social contributions and self-development, and an 'Extrinsic value factor', reflecting the value of pursuing financial success and social status (alpha = .86, .87). The result indicates that differences in utility value for studying abroad may lead to different adaptation outcomes. The implications for supporting international student are discussed.

Key words: utility value for studying abroad, cross-cultural adaptation, goal content theory, international student